

書架を眺めて

大津 直規

私の職場は、線路南側の別科棟です。土曜日には調律実習のためにSPCと5号館に行きますが、それ以外の平日は本部棟や図書館を訪れる以外は別科棟で過ごしているために、学内の方々とほとんど顔を合わせる機会がない生活です。中学1年生から管楽器を始め、高校1年の秋から3年半、エチュードに明け暮れる日々でしたが、自分で吹いてみたい曲、好きな作曲家との出会いもありました。自分が吹いていない時は、買うことのできた限られた枚数のレコードが鳴り続けているという状態でした。しかし、別科に入学すると実習に明け暮れる日々となり、学んできた楽器に接する時間も少なくなりました。

そのころから自分の好きだった作曲家の生きた時代の社会環境を知りたくなり、本を探すようになりました。世界史の授業ではそれぞれに地域の歴史を縦割りに学習することが多いのですが、音楽史上の一時代を取り上げて、その年代で地球を輪切りにすると意外な発見に出会うこととなります。切っ掛けは、1980年2月に朝日新聞夕刊で連載の始まった『中世の窓から』（阿部謹也著 176-1261）でした。

好きな作曲家の時代に身をおきたくて読み始めた本は、その作曲家の2、3世代前の時代を手始めに、どんどん歴史をさかのぼっていくことになりました。私がおもっても本を読んだこの時期に、私は一人の調律師として生きていました。仕事の先々で最寄りの書店にも立ち寄り、社会科学、自然科学、人文科学の棚をあさる日々でした。ギリシャ時代には、天文・幾何・算術とともに4大教科の一つであった音楽ですが、そこから自分が高校時代から学生時代に出会った好きな音

楽への多くの興味がつながりました。時には、作曲家の技法の変化を鍵盤楽器の改良面からだけでなく、社会的環境や価値観とその移り変わりに自身を置いて考えたりもしました。

このように本を読み続けてきた私にとって避けて通ることのできなかつた本が、M. プレトリウスの *Synagma musicum* (音楽大全) の第2巻(郡司すみ訳 『音楽大全II 楽器誌』 CG4-126) です。

『音楽大全』は多くの楽器学の本に引用され、私も原著の復刻版を手にはいたものの、日本語では出版されていませんでした。ところが私が本学に非常勤講師として関わり始めた年に、名誉教授・郡司すみ先生から、先生の手によつて第2巻の訳ができあがっていること、出版をお考えであることをお聞きしましたが、その原稿を読ませていただいた時の感激を忘れることはできません。その後、出版されて、だれもが、いつでも日本語で読むことができるようになったことはすばらしいことだと思います。

ところで、個人の書架と図書館の果たす役割には大きな違いがあると思います。ある恩師の転居のお手伝いで書架を整理させていただいた時に、個人の「知の歴史」を垣間見させていただいた気がしました。自宅なのか図書館なのか、本の所在はいろいろでも、心の中には自分自身の書架ができていて、そのような「知の歴史」を残したいと思います。

学生時代に聴き続けた演奏がCDとなつて所蔵されているのを探し出したり、演奏してみたかった曲の楽譜を借りて「ちよつと吹いてみる」楽しい時間を過ごすために、私の図書館通いは続いています。